

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	教育教材具論
Author(s)	盧, 愉珍
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集, 1999 : 15 - 22
Issue Date	2000-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00038916">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00038916</a>
Right	
Relation	



# 教育教材具論

の 愉 珍  
盧 ゆじん

## 日本語教育

外国人に日本語を教える日本語教育の分野が急激に発展してきている。日本の経済大国化にともない1970年代後半から急増し始めた世界の外国人日本語学習者は90年で163万人にのぼり、日本国内でもこの20年間はその受け入れにおわれてきた。

これにより教師の質の低下が問題になり、87年に日本語教育能力検定試験が発足して以来10年以上が経過し、すでに2万人以上の合格者を出しているが、日本語教育の内実が格段に充実したとはいえない状況が続いている。つまり、外国人に日本語を教えようとする人は、教え、学ぶ対象が「日本語」という言語であることから、日本語の音韻・文法・語彙などの日本語そのものに対する知識及びその運用能力、また、日本語の教え方つまり教授法を学び、研究することが求められるようになったのである。

また従来は、日本文学や日本の古典芸能などの専門家になるために日本語を学習するという大学生が典型的な学習者であったが、学習者の数が増加するにつれ学習者の背景も多種多様になってきている。海外では、専門未定の学部学生や日本研究の大学院生を中心に日本関係の企業に勤務する外国人や一般社会人、それに最近では中学・高校生なども第2外国語として学習するようになってきた。国内では、留学生、会社員、一般社会人、外交官およびその家族、技術研修生、海外帰国子女などをあげられ学習者の母語も多岐にわたっている。従って学習者のニーズ（学習者が現在、または将来使う必要のある種類の日本語、あるいは学びたいと考えている日本語）も様々になってきている。そのため、学習者たちのニーズに応えられる教授法や教育教材の開発が緊急に求められている状況である。

## 教授法

海外において開発された各種教授法は日本語教育にも取り入れられ、教育の効率化に貢献している。古くは大正時代に文部省の英語教育顧問を務めていた言語学者パーマーの提唱したオーラル・メソッドが日本語教育の会話指導理論に大きな影響を与え、戦後には一時期、オーディオ・リンガル・メソッドの欠点が指摘されるようになり、認知主義的理論や学習者中心の教授法、聴解中心の教授法などが実験され、採用されるようになってきている。ここでは教授法の中でも最もよく知られているものをいくつか例としてあげてみる。

### 文法翻訳法（GT方式）

古代から中世にかけて行われてきた文法指導を中心とする翻訳教授法。ローマ時代からラテン語やギリシャ語の教育に使われていたが、始めに、学習する外国語の文法規則や語形変化などを暗記させ、次いで外国語の文を母国語に翻訳することによって文の内容を理解し、そこに現れる語彙を覚えるよう指導する伝統的な方法。読み書きの訓練が中心で口頭練習や音声面の指導は重視されなかったため、ヒアリングやスピーキングの能力養成が困難であったことから、19世紀以降欧州諸国の間に国際的な交流が盛んになり、会話能力のための外国語教育が求められるようになると、その要請に応えることができず、次第にオーラル・アプローチなどの新しい教授法に取って代わられることになった。

### ナチュラル・メソッド

伝統的な文法翻訳法では実際的な会話指導がおろそかにされているので、それに対する批判から生まれた教授法。幼児が母国語を習得する過程をモデルにして、対象言語を使って、会話の練習を行うのでナチュラル・メソッド（自然的教授法）と呼ばれている。アメリカで開発されたベルリッツ・メソッド（Berlitz Method）とフランスで始まったグアン・メソッド（Gouin Method）が代表的。特に、ベルリッツはルソーの自然主義の理論に基づいて幼児の言語習得過程を外国語教育に導入しようと試み、外国語の音声とその概念を直接に結びつけるために、教室ではその外国語のみを使い、学習者の母国語による説明や翻訳を排したので、後のダイレクト・メソッド系の格理論に多大な影響を与えている。

### ダイレクト・メソッド（直説法）

外国語を教える際に、その対象言語（target language）だけを使って指導する教授法。伝統的な文法翻訳法に対する反動と会話能力の向上を求める時代に応えて、19世紀末から20世紀初頭にかけて開発された。音声面の教育を重視し、訳読はせず、文法も体系的に紹介することはない。基本的には幼児が母国語を習得するのと同じ過程を通して、外国語を学習させるという考え方で、その点ではナチュラル・メソッドと同じであるが、ナチュラル・メソッドに音声学や心理学を取り入れ、発音を重視し、教育に発音記号を導入したり、新語を実物や絵、アクションなどによって教えるなど、さまざまな工夫がなされている。現在の日本語教育でも、有力な教授法の一つとなっている。特に、学習者の母国語がばらばらで媒介語の使用が困難な留学生・就学生の教育ではこの教授法が盛んである。

### オーラル・メソッド

英国の言語学者ハロルド・パーマー（Harold E. Palmer, 1877～1949）が開発し

た教授法で、日本の英語教育、日本語教育に大きな影響を与えた。外国語教育において音声面の教育、口頭練習に重点を置く教授法。具体的な物を教材にしたり、ある行為を実演してみせたりして、必要な表現を教えていく点では、一種のダイレクト・メソッドともいえるが対象言語による場面に場面に応じた問答を通して、文型や表現を習得させる指導法に特色がある。

#### アーミー・メソッド

第 2 時世界大戦中にアメリカ陸軍は軍事的・戦略的目的から米国陸軍専門教育計画 (Army Specialized Training Program, ASTP) を立案し、当時すでに米国区学術評議会 (The American Council Of Learned Societies, ACLS) の援助を受けて外国語の集中語学教育の研究に従事していた構造言語学者たちの協力を得て、地域研究と外国語教育を行ったが、その際、米国陸軍が期待していた「話ことば」中心の教育と当時のアメリカ構造言語学者たちの「言語の本質は言葉」とする原則が一致し、短期間のうちに外国語の集中訓練の施行案が作られ、実施に移され、多大な成果を上げたので、一躍この教授法が有名になった。この訓練方式の特徴は小人数のクラスで、言語学者による文法理論の講義とネイティブ・スピーカーによる口頭訓練を柱に、LL などの教育機器を充分に利用した当時の最新の教授法であった。

#### オーディオ・リンガル・アプローチ (AL 方式)

音声言語主体の教授法。言語の四技能 (聞く、話す、読む、書く) のうち、まず聞くことと話すことの訓練に重点を置き、次の段階で読みや書きの練習を行う方式。例えば、まず言語の基本構造を日常よく使われる会話文の形で提示して、それらをミム・メモやパターン・プラクティスなどの口頭練習によって学習させ、次にその内容を文字で読む練習をさせる教授法。基本的な考えは行動主義や構造言語学に基づいているので、言語構造のパターンを繰り返し練習させることによって言語の技能を習得させる方式を採用。日本ではオーラル・アプローチと呼ばれることが多い。またミシガン大学フリーズが中心になって開発した方式でもあるので、ミシガン・メソッドとかフリーズ・メソッドと呼ばれることもある。

#### トータル・フィジカル・リスpons・アプローチ (TPR)

アメリカの心理学者アッシャー (James J. Asher) が開発した教授法。学習者の聴解活動をその身体的動作に結び付けて、記憶を強化する方法を採用。初歩の段階では教師が命令文を発し、自らその命令に従う動作をしてみせ、次に学習者 (たち) に動作をさせ、その命令文の意味を徹底していくやり方で、次第に命令文の種類と内容を高めていく。すなわち、「歩いてください」を充分練習してから、「窓まで歩いてください」を導入し、次い

で「窓まで歩いて、窓を開けて下さい」というように命令内容を拡大し、学習者の聴解能力を育てていく点に特徴がある。この教授法は、幼児の言語習得の前に聴解活動をし、それを身体的行動と連動させて行えば、学習の効果が上がるとの仮説に基づいている。

#### サイレント・ウェイ（沈黙式教授法）

アメリカの数学者で心理学者であるガッテグニョ（C.Gattegno）の開発による教授法。目標言語の発音を指導するために同音同色に色分けされて印刷されているつづり字の表や、いろいろな長さでそれぞれ同じ長さのものは同じ色になっているロッド（rod, 細長い棒）などを教具として使う。印刷のつづり字表を使って、発音を指導したり、いろいろなロッドを物や人、動物などになぞらえて、語彙や文型を教えていくが、通常教師自身はあまり発言せず、クラスでの時間は主として学習者の発表に当てられ、学習者の発言に誤りがある場合でも、教師は提唱もしなければしかりもしないので、サイレント・ウェイと名付けられている。教師は発言を控えているが、学習者同士が助け合うのは奨励され、そのような習慣がみにつくと、グループ・ダイナミックの原理が働き、学習動機が強化され、効果も上がるとされる。

#### カウンセリング・ラーニング

アメリカの心理学者カーランが開発した教授法で、カウンセリングの原則を言語教育に応用したもの。クラスを一種のコミュニティと見なして、教師がカウンセラー、学習者たちがクライアントとなり、協力して、課題を解決する方法で、外国語を学習していく。具体的には教師の示唆によって、学習者同士が話し合い、その日の課題を決め、それについてら学習者全員が助け合いながら、話を進めていく。教師は求められた場合にのみ、適切な助力をする。このように学習者主体でクラスが行われる。クラス終了後、反省の時間を設け、そこでも学習者主体の討議と反省が行われる。コミュニティ・ランゲージ・ラーニング（Community Language, CLL）とも呼ばれる。

#### サゼストペディア（暗示式教授法）

ブルガリアの精神科医ロザノフ（G.Lozanov）が考案した教授法。精神療法の理論を言語教育に応用したもの。暗示と精神的集中によって学習効果を上げるために、居心地のよい部屋を準備し、そこで学習者にヨガの運動や呼吸法をさせたり、古典音楽を聞かせたりして、リラックスさせながら、情報を与えていく。学習者は不安のない楽しい雰囲気の中で、それらの情報を受け取る。このような不安やストレスのない状況では、記憶力も創造性も高まり、学習が驚意的に促進されるという。この教授法はブルガリアをはじめ、東欧諸国やソ連で盛んであるが、最近では、アメリカ、カナダでも研究され、日本でも一部の教育機関で実験的教育が行われている。

### コミュニケーション・アプローチ

1970年代からヨーロッパを中心に発展してきた外国語の総合的教授法。言語による意志の伝達に重点を置いて指導する。ヨーロッパ評議会（Council of Europe）などの概念シラバス（notional syllabus）を取り入れ、学習者に言語知識ではなく、言語を使用する場面と結びついた実際的な伝達能力を身につけさせようとする教授法。社会言語学などの理論も採用し、現代外国語教育の一大潮流をなしている。

### 教育教材教具論

従来教材といえば一冊の教科書にした録音テープ、宿題などが主であった。学習者のニーズが日本文学の研究をする大学院生に代表される単一のものであったからこれで大きな問題はなかった。これに対して現在ではニーズは多様化し、また本来ニーズは学習者が日本で生活する間に変わっていく性質のものであるから、各種のニーズに合った教材が必要とされている。教科書としては文法中心のほかに機能や話題中心のもの、副教材としては変化に富んだ機能・話題などの活動が可能になるような教室教材と並んで、自習教材、能力差に応じて使える型の教材、教科書に縛られずに使える教材などが開発されつつある。

### 教科書

教科書は主教材ともいわれコースの中心として使われる教材を指す。学習者が多様化しつつある今後の日本語教育では教科書だけで授業を行うのでは、学習者のニーズに応えることができないから、教科書をどう使い、どんな副教材と組み合わせるかがポイントとなる。教科書がコースデザインの役割も果たし教師や学習者がそれに従うという使用方法から、教師にとってはコースの軸を設定するための、学習者にとっては大筋どんな順序で何を学ぶかを知るための手段であり安心感のもととなるという限定された役割をもつものになりつつある。

### 副教材

副教材とは主教材である教科書にくみあわせて使われる教科書に組み合わせて使われる教科書の機能を補う教材を指す。教科書が一般化され普及化された幅広い学習者を対象に作られているのに対し、副教材はこのような教科書で対応できないクラスの中の個々の学習者のニーズに応じた活動を提供するものとして作られるものである。また教科書が一定の順序にそって使うことが前提であるのに対して、コースの途中でさまざまに変化していくニーズに合った副教材を準備するといった使い方も可能である。このような点で副教材は日本語の指導を柔軟に行うための鍵を握る重要な部分となりつつある。

### モジュール型教材

モジュール型教材とはそれだけで自己完結している教材で、教科書のように特定の訓序にそって一つ一つ課を学習するタイプの教材とは違い、学習者の既習事項から一定程度独立して使えるように作成されたものである。学習者のニーズは、学習者が日本で生活を始めるにつれて変化していくが、その変化の各段階においてそれぞれの時点のニーズに合った学習が実現できることが望ましい。モジュール型教材は学習者がニーズを意識化した時点でそれにふさわしい学習を提供することを可能にする。

### 自習用教材

日本語教育機関が近くにない地域に住む学習者や、あっても参加するための時間が確保できない職業であったり、経済的に参加が難しいような場合や、教室で使われる教室教材と平行して学習者個人の能力やニーズに合わせて学習する場合に使う教材である。例えば、主教材としては水谷修・信子著 An Introduction to modern Japanese、副教材としてはテープによる聴解を主体としたもの、また授業と平行して使うモジュール型のものや、学習後の自己評価や日本語教育の専門知識をもたない一般人の補助を得れば使えるようなものが開発されつつある。モジュール型教材同様学習者の諸条件の多様化に見合った教材として重要になってきている。

### レアリア

特に初級で使われる実物教材を指す。「こそあと」や「上下中外」などの位置関係や各種の語彙の指導に有効である。言葉で描写しようとする学習目標の項目よりも難しい語彙・表現を使わなくてはならない時や臨場感を求めたいときなどに有効である。短所としては抽象的な内容を導入しなければならに時は使えないこと、また毎回の授業で実物を数多く集めることはかなりの準備の時間を要すること、ペアで活動させるような場合同じようなものを数集めることは容易でないこと、などがある。

### ロールカード

学習者それぞれに演ずる役割を箇条書きにして指定したカードを渡して目標となる構文・語彙を使えば後は自由に会話をさせるという形式のロールプレイをさせる場合、その指定したカードをロールカードと呼ぶ。与えられたダイアログのそれぞれの役を暗記し、演ずるといったものではない。普通、医者と患者、定員と客、駅員と乗客といった組み合わせでそれぞれが果たさなければいけない条件があたえられる。ある程度の語彙・構文の学習が終わった初級後半以降適切な教材である。

### ピクチャーカード

レリアが臨場感をもたらす点で有効であるがそれを用意するのに時間がかかるに対して、臨場感は落ちるけれども準備と管理が容易であるものがピクチャーカードである。ピクチャーカードは今まで初級で正確かどうかを調べるための練習のため、置き換え練習などによく使われたが、最近では、一部異なる絵をペアのそれぞれに持たせお互いにどこが違っているかを言葉を使って捜し出させたり、ドラマ性の高い絵を見せそこで何が起きているかを説明させたり、いくつかの絵をつないで物語をさせるなどの練習にも使われるようになってきている。

#### CAI

COMPUTER ASSISTED INSTRUCTION の略。コンピューターを利用した指導方法である。普通は漢字や仮名などの文学学習、文法の練習など学習者のみがコンピューターと向き合って使用する。単純に答えがまちがっていれば「誤っている」といったフィードバックをするだけのものから、正しい答えが出ない場合にはヒントを与えたり正しいものが出てくるまで答えを試みることができるものまでさまざまな段階のものがある。一般に教室では教師がほかの学習者とのコミュニケーション活動に重点を置き、自習用教材としてCAI教材を用いるのが通常である。

#### 結論

近年海外で研究・開発された「教授法は」、おおむね会話能力の向上を主眼とするコミュニケーション・アプローチの系統に属するものが多いが、現実の日本語教育では必ずしも会話能力の向上が優先されているわけではない。場合によっては、講読・読解能力に重点を置く教授法も必要である。また、母語の異なる学習者たちを教育する機関ではダイレクト・メソッドが向いているだろうし、学習者の母語が同じである場合には、媒介語の使用が学習の効率化に役立つこともあるだろう。折衷的な方法として、文法の説明や語彙リストなどは学習者の母語によって説明されるが、授業は、日本語だけで行う方針を採っている機関もある。

つまり教育法には絶対的なものがあるわけではなく、学習者の学習目的によって、また学習条件、能力、背景の相違などによって、異なった教授法が採られているわけである。その意味で、最も優れた教授法とは、学習者学習目的達成に最も有効な教授法のことであるといえる。従って、教授法の選択に当たっては、学習者の学習目的、到達目標、学習期間、時間数、学習者の資質、学習環境などを考慮して決めるべきであるが、その実施に際しては一つの教授法理論にこだわることなく、学習者の能力向上を第一に考え、弾力的に運用することが望ましいだろう。

今までの例からみると新しい教授法は古い教授法の弱点を補うための消極的なものが多く、また、日本語以外の言語つまり外国語で取り扱われている教授法をそのまま日本語



教育に採り入れるといった形のもものがほとんどだった。でも、これからは日本語教育者自身による日本語教育に合った独創的な教授法を期待してみたい。

教材に関しても同じことがいえるだろう。

今までいろんな日本語教材が発案されてきたが、これからも中心的な教材としての役割をもっていくものはやはり教科書だろう。

教科書はかなり幅の広い一般の学習者を念頭において作られている。教科書のある特定のクラスの学習者を対象に使うに際しては、その教科書が、どのようなニーズの学習者を念頭に置き、どの学習項目を、どのような教授法に沿って、さらにどんな学習活動を想定して作られているかについて分析し、その分析結果に基づいて、現在対象としている学習者および教師には、何が充分で、何が不足しているかを検討しなければならない。その結果足りない部分は副教材あるいはロールカード、コンピューターなどで補えるようにして日本語学習者の日本語能力向上のため力を注がなければならない。

結局教授法や教育教材は日本語教育を効率よくするための手段なのでお互いの短所を補い合う連携関係が必要とされるだろう。

また、今日世界各国での第1外国語は英語が圧倒的な部分を占めているが、第2外国語なら日本語はこれからも需要が伸びていく見通しがあるので、その点からも学習者のニーズや時代の流れに合わせた、「第2外国語用」の日本語教育法を研究することが重要になってくるだろう。

#### 参考資料

川口義一 「日本語教授法」AREA MOOK 日本語学のみかた 1997

細川英雄 「国語教育と日本語教育」AREA MOOK 日本語のみかた 1997

鮎澤孝子 「日本人のための日本語教育」AREA MOOK 日本語のみかた 1997

田尻英三 「海外で学ぶ日本語」AREA MOOK 日本語のみか 1997

「日本語教師読本」編集部 「日本語教育入門用語集」アルク 1989